

伐採の時、骨折して

島根県 岩崎 輝

その当時、私は二十五歳で、銀行員でした。

昭和二十年五月に臨時召集により、ソ満国境の孫呉、野砲兵第一二三連隊に入隊しました。

八月九日ソビエト参戦のため、私達は陣地で戦闘準備中の十七日に敗戦を知り、武装解除を受け、孫呉に戻され露営していました。

九月二日、日本に帰国させるということで、約百人の集団を編成して、黒河から対岸のブラゴエンチェンスク近郊に連行されました。

翌日から農園（コルホーズ）で馬鈴薯掘りをさせられ、終わると次のコルホーズへと移動させられました。毎日馬鈴薯掘りが続きました。移動も突然のことが多く、移動の度に持ち物の紛失が多々ありました。

食事は、大人の拳ほどの黒パン一切れと、飯盒に三

分の一ほどのスープを一日二回与えてくれていたが、いつだったか何日間か食糧を与えてくれず、収穫した馬鈴薯を無塩で食べ続けたせい、体が浮いた感じになり、落ちつきがなくなりました。

休日もなく労働にかり立てられ、疲労の蓄積と栄養失調でフラフラになっていました。十月中旬から作業も伐採に変わり、転々と移動しました。天幕生活から半地下室の丸太造りの建物に落ちつくことができなくなりました。

伐採は力とコツの要る仕事でした。十月二十日、私は同僚と向かい合って木の根元を鋸で引いてしまったところ、突然風向きが変わり、木が私の方に倒れてきたので逃げかけた時に、左足の上に木が倒れて反動して二度当たり、骨折してジーンと痺れました。

医務室に運ばれましたが医薬品もなく、針金で骨折箇所を固定して包帯をしてくれました。氷嚢もなく、患部を冷やすこともできず放置状態で、一週間後、ソ連の医者が診察して入院を指示しました。二、三日して、ソ連兵に警備され、同僚にオンブしていただき列

車に乗りクイブシェフカの病院に入院しました。

ソ連の看護婦が、寒いのに全裸にして水で体を洗い、毛髪を剃って、白木綿の患者用の服を着せて病室に案内してくれました。

この病院でもレントゲンも撮らず、ソ連の医者が骨折箇所を手で触れるだけで針金もそのまま、包帯をしてくれました。

入院患者は独ソ戦で負傷したソ連兵が多く、日本人の患者は私達十五人と聞いていました。

同室の患者は、骨折や銃創などで歩行不能な者が多く、入り口の寝台に通訳の日本人が起居して、医者と患者の連絡をし、病室の掃除はソ連の中年婦人が担当をしていました。

私達は病院内の病室と廊下だけの生活で、外部とは遮断されていました。食事は、量は少ないが白パンやお粥と塩漬けの魚などでした。

私はただ安静にしているだけの毎日で、このまま複雑骨折で歩行不能になるのではないかと不安な気持ちで、痺れて、腫れた足を眺めていました。

寒さが厳しくなるにつれ日本人の入院が多くなり、ソ連兵の患者は他の病院に移し日本人だけになりました。

昭和二十一年になると凍傷患者が激増して、一台の寝台に二人が寝ることになりましたが、未知の者と頭と足を逆にして寝ていると目の前に凍傷の足があり、不気味な感じでした。

それでも患者を収容できなくなったので、治療を要しない者で一人歩きできる者を選んで、当時、北満を制圧していた八路軍に引き渡すことになったようでした。

一月末に百人ほどが突然退院をさせられて、所有者不明の汚れた軍服一式をくれ、着替えて、入院の際に預けた軍服や持ち物（私物等）は一切返却されずにトラックに乗せられ、ソ連に入った時とは逆の方向にブラゴエシチェンスクから黒河の病院に連行されました。

病院は煙草会社の倉庫で、暗く不潔な床いっぱい病人が寝ていました。私達は、看護している日本兵が

ら各班に割り当てられ、寝る場所を与えられました。

持ち物のない私達は、床に敷く物も体にかける物もなく、冷たい床に直接横になっていました。この病院では寝具の支給もなく、治療も薬品もなく放置されていたため、毎日死亡者が続出しました。私も折角ここまで快復したのに伝染病になり発熱して、意識がモウロウとなったことが何回もありましたが、幸いにも生き長らえて、三月末に北安の病院に移り、ハルビンで難民生活をして十月、コロ島発にて広島県大竹港へ帰国し、奇しくも骨折した十月二十日に松江市に到着しました。

シベリア抑留記

岡山県 片山 衛 真

一・終戦

興安嶺

私は終戦の時、興安嶺に関東軍歩兵三六一部隊第九

隊の一員として従軍していた。

戦後四十数年過ぎた時、興安嶺進攻作戦がソ連特集としてNHKで放映された。ソ連特集によると、ソ連重戦車隊は重装備された関東軍を撃破、南滿に進撃すると、樹木を倒して前進する戦車が放映された。戦争を知らない世代の人がこの放映を見れば、興安嶺はソ連軍に突破されたと信ずる。真実は、興安嶺は終戦の日まで死守され、ソ連軍の進入を許さなかった。ソ連軍の戦車隊が興安嶺を通過したのは戦争の終わった八月十六日だった。樹木を倒して進撃する、その樹木は興安嶺では見られない木である。興安嶺には白樺の木が密生しているけれど、その白樺は一本も見られない。ソ連の興安嶺進攻作戦は、他の場所で作られた間違った報道が真実のように放映された。ソ連は、重装備された関東軍を撃破と言っているが、関東軍の主力は南方戦線に参加、興安嶺には軍の航空機、戦車の姿は見られず、迎撃火砲もない。対戦車砲のない関東軍はいかに戦い、戦車の侵入を終戦の日まで死守したか。それは肉攻であった。肉攻攻撃、ダイナマイト